性差別に敏感になる

福井県立高志中学校　３年　橋本　夏怜

男女で異なる扱いや偏見にもやもやした経験はないだろうか。

私は「女の子だから」と言われることが好きではない。例えば、私が元気に「おう。」と返事をすると、祖父は「女の子だから『はい。』と言いなさい。」と言う。祖父母の意見に反論すると、「素直に分かりましたと言ったほうがかわいい女の子だよ。」と返される。将来の話になると、「結婚して子供を産めば寂しくないよ。それが普通の幸せだよ。」と言う。彼らに悪意はない。私の幸せを願った真剣な言葉だからこそ、怒りや悲しみ、悔しさが心に渦巻いた。

性別を理由に何かを決められるのは誰だって嫌なはずだ。自分のことは自分で決めたいし、性別に関わらず、個性や好きなことを大切にしたいと誰もが思うだろう。生物学的な性とジェンダーは異なる。体の違いはあっても、思考や能力に性別で優劣はないと私は思う。だからこそ、性別ではなく一人ひとりの性格や特性を見てほしい。人々が自分らしく生きるためには、男女に関する固定概念を少しでも減らすことが大切だ。

その一つの方法がジェンダー教育だ。イギリスでは義務教育に取り入れられており、ＮＧＯのプランインターナショナルも各国でジェンダー教育の授業を実施している。教材として絵本やカードゲームなどもあり、大学の授業やワークショップでも使われている。

私も以前、ジェンダー教育の講義に参加したことがある。グラフや様々なデータから日本の現状を知り、私たち自身が考える機会を与えてくれる内容だった。

この夏休み、私はジェンダー教育のためのパンフレットを自作した。生物の性転換や家族の形など多様な生態を紹介し、「性別にとらわれず、それぞれの生き方がある。」というメッセージを込めた。「性別って何だろう。」と考えるきっかけになればと思った。「人間と他の生き物は違う。」と捉えることも「性別は曖昧なものかもしれない。」と考えるのも自由。生物学的な性とジェンダーが同じものだと捉えられないよう試行錯誤して作った。秋にこのパンフレットを使って短い抗議をしたいと考えている。

まずは、日常生活での性差別的な言動に目を向けてみてほしい。偏見に気づき、時には優しく訂正することで、周囲の人もジェンダーについて考えるきっかけになるかもしれない。人間の固定概念は幼少期から青年期にかけて形成される。だからこそ、子供と一緒にジェンダーフリーの考え方を話してみてほしい。

一人ひとりが性差別に敏感になれば、声を上げやすい空気が生まれ、自分らしく生きられる場所が広がっていく。ジェンダー平等の社会が、少しずつでも広がっていくことを願っている。